

〔報 告〕

入院中の患児ときょうだいとの面会が患児にもたらす効果

—付添い中の母親の認識を通して—

Effects of visiting siblings on hospitalized child-perceptions of mothers

平田 研人 前田 貴彦

【要 旨】

本研究は、急性疾患で入院中の患児ときょうだいとの面会が患児にもたらす効果はどのようなものであると、付添い中の母親が認識しているのかを明らかにすることを目的とした。A県内の小児病棟を有する1施設に、急性疾患で入院中の患児に付添い、患児ときょうだいをもつ母親で、入院から1週間以内にきょうだいの面会があった者7名に対し、半構成的面接を実施した。母親が認識する入院中の患児ときょうだいとの面会が患児にもたらす効果として、【活力の充足】 【楽しさの実感】 【安心感の獲得】 【満足感の獲得】 【精神的負担の緩和】 【喜びの実感】 【きょうだいとの親密さの出現】 【年上としての自覚の出現】の8つが見出された。そして、母親が認識したもたらす効果の中で注目すべきことは、きょうだいと面会で普段通り遊ぶことができたことで、患児が入院や治療に対し前向きな気持ちになることができ、病気の回復を促進する可能性があるといった【活力の充足】であった。

【キーワード】 患児 きょうだい 面会 認識 効果

I. はじめに

少子化が進む現代ではあるが、子どもの発達において親子関係同様きょうだい関係も重要である。家族集団の中で、子どもが多種多様な人間関係を体験することは、成長後の社会適応にとって望ましく、きょうだいがいることで、より多くの人間関係を体験することができる¹⁾。また、きょうだいは互いに比較し合う存在¹⁾であると同時に、特に幼児期では親密な交流を行う²⁾存在であることから、入院などにより両者の分離が生じた際は、会えないことで両者が寂しさを感じることは容易に推測できる。

現状の小児の疾患や入院状況を概観すると、罹患疾患では、急性上気道感染や肺炎といった呼吸器系疾患が多くを占めており³⁾、比較的入院期間が短いと考える。しかし、急性疾患で短期間であっても入院中の患児ときょうだいに関して、家に残されたきょうだいに関する先行研究では、年代によらずきょうだいに

様々な精神的・身体的影響が生じることが指摘されている⁴⁻⁸⁾。特に、2歳から5歳の年齢では、両親からの分離による不安は最も強く、うつ状態や、甘えが強くなった、人見知り、登園拒否、反抗的、感情の起伏の激しさなどが見られている⁶⁾⁹⁾¹⁰⁾。一方、急性疾患で入院中の乳幼児期の患児であれば保護者である母親が付添いしていることが多く、その際は母親との分離は生じない。

しかし、現在、感染予防を理由に子どもの面会を制限している病院が多く、面会制限のために、きょうだいは患児と直接的なコミュニケーションが持てず、両者の距離感が広がってしまうことが危惧されている¹¹⁾。入院により患児ときょうだいが分離されることにより、患児に生じる影響について十分検討されていないものの、きょうだいに及ぼす影響を患児に照らし合わせて考えると患児におよぼす影響も少なくないことは容易に予想できる。また、きょうだいへの精神的・

身体的影響の時期は、母親や患児と離れた直後から始まり、特に患児が重篤時であれば、精神的に不安定になりやすく¹²⁾、急性疾患で身体的に苦痛を感じている患児であれば、なおさらきょうだいと離れた直後から影響があると考えられる。さらに、実際の臨床場面において、患児がきょうだいを求める声が聞かれることがあったり、保護者からもきょうだいとの面会を望む声が聞かれたりする。

入院中の患児ときょうだいの関係を継続し、きょうだい分離や母子分離の影響を軽減させるためにも、現行の面会時間や制限の見直し¹¹⁾¹³⁾が指摘されている。先述したように、本邦では感染予防を理由に子どもの面会を制限している病院が多いが、守るべき基本的な感染予防対策が確実に実行されるならば、事後的・偶発的な発症例を除いて、病棟内での感染症は増加しないことも報告されている¹⁴⁾。

よって、入院中の患児ときょうだい関係に関して行われている支援の中でも、面会は患児のきょうだい分離による精神的影響を緩和させるための有効な手段の一つであると考えた。

今回これらを検討するにあたり、本来であれば患児を対象とするのが望ましいが、現状では急性疾患で入院中の患児の多くは、自己の考えを他者に理論立てて説明することが難しい年齢である。また、第三者の研究者が面会場に立ち会い参加観察を行うことは、患児ときょうだいに不安や余計な緊張感を抱かせ普段の姿や両者の関係性に影響を及ぼす可能性があると考えた。そのため、患児ときょうだいにとって身近な存在で普段の様子も十分把握している付添中の母親の認識から検討した。

II. 研究目的

急性疾患で入院中の患児ときょうだいとの面会が、患児にもたらす効果はどのようなものであると、付添い中の母親が認識しているのかを明らかにする。

III. 用語の定義

急性疾患：急激に発症するが、症状が短期間しか持続せず、治療により軽快する疾患のなかで、入院加療を必要とするもの。

付添い中の母親：入浴や食事等の用事で限定された時間のみ病院を外出することはあるが、入院中継続し

て患児と同室で生活を共にする実母。

もたらす効果：好ましい状態を生じさせたり、良い方向に変化するなど、各人にとっての望ましい結果。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究対象者

A県内の小児病棟を有する1施設に、急性疾患で入院中の患児に付添い、患児にきょうだいをもつ母親で、患児の入院から1週間以内にそのきょうだいの面会があった者7名。

なお、患児・きょうだいには精神疾患や発達遅滞のないことを条件とした。

3. 調査方法

平成23年4月～平成24年10月にインタビューガイドを用いて半構成面接を個別に実施した。面接は、初めてきょうだいと面会のあった日の翌日など比較的早い段階で対象者の希望する日に、静かな環境を保つことができる病棟の面談室等で実施した。

面接内容は、①母親、患児、きょうだいの背景、②患児の面会に対する考え、③今回面会したことにより生じたと認識した患児の変化、④今回の面会が患児にもたらしたと認識した影響や効果とした。

4. 分析方法

面接内容から逐語録を作成し、母親が認識する患児ときょうだいとの面会が患児にもたらす効果について話された部分を抽出し、意味内容を確認後コード化した。コードの類似性や共通性を確認しながらサブカテゴリー、カテゴリーを見出した。

なお、分析は、研究メンバーである小児看護学の専門家で質的研究の経験者である研究者と小児看護を実践しており、看護研究の経験のある看護師の2名で個別に分析を行い、サブカテゴリー、カテゴリーを比較し、2名の分析結果が一致するまで検討を繰り返し、真実性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

本研究は三重県立看護大学倫理審査会および当該病

院の倫理委員会の承認を得た上で実施した。対象者に対し、研究者が本研究の目的・方法、プライバシーの保護、秘密の保持、研究への参加の自由性、途中辞退の自由性とそれによる治療や看護に対する不利益のなさ、結果の公表、面接内容の録音について書面と口頭で説明し、同意については同意書への署名にて確認した。

V. 結果

1. 研究対象者の背景

母親の年齢は、30代6名、40代1名であった。患児の年齢は、1歳2名、2歳3名、3歳1名、10歳1名であった。きょうだいの年齢は、4歳5名、5歳2名であった。平均面接時間は、57分であった。また、面会をした日は入院当日が1名、1日目が1名、3日目が2名、5日目が2名、7日目が1名であった。

2. 母親が認識する患児ときょうだいの面会が患児にもたらす効果

分析の結果、17のサブカテゴリーと8のカテゴリーが見出された(表1)。

以降、対象者の話した言葉を「斜体」、サブカテゴリーを〔 〕、カテゴリーを【 】で示す。なお、補足語を()で示す。

1) 【活力の充足】は、「病気になったことやきょうだいに会えないことでの気持ちの落ち込みが、面会をすることで消えてプラスになると思います。」と、「入院に対する落ち込んだ気持ちから前向きな気持ちへの転換」や「入院中は、ずっとベッドの上なのでストレスも溜まっているし、お姉ちゃんにも会いたがっていたので、会うと元気が出るかなと思います。」と、「きょうだいと会えたことでの活気の出現」をもたらす効果と認識していた。また、治療や病気の回復

表1 母親が認識する患児ときょうだいの面会が患児にもたらす効果

カテゴリー	サブカテゴリー
活力の充足	入院に対する落ち込んだ気持ちから前向きな気持ちへの転換
	きょうだいと会えたことでの活気の出現
	きょうだいと会えたことでの治療に対する前向きな気持ちの出現
	楽しみを実感することでの病気の回復を促進する可能性
楽しさの実感	つまらない入院生活での楽しさの実感
	普段きょうだいと共に過ごしている時以上の楽しさの実感
	疾患から生じる苦痛を忘れさせるほどの楽しさの実感
安心感の獲得	家族一緒という自然な状態になれることでの安心感の獲得
	きょうだいに会えないという意識から会えると分かったことでの安心感の獲得
	実際に会えたことでのきょうだいを心配する気持ちの軽減
満足感の獲得	きょうだいに会えたことでの満足感の獲得
精神的負担の緩和	きょうだいに会えたことでの入院のストレスの軽減
	きょうだいに会えない寂しさの緩和
喜びの実感	久しぶりにきょうだいに会えたことでの普段以上の喜びの実感
きょうだいとの親密さの出現	普段見られないほどのきょうだいとの親密さの出現
	普段のきょうだいの仲の良さの再現
年上としての自覚の出現	普段見られなかった年上としての自覚の出現

に対して、「面会をしたことで、お姉ちゃんに会ったし、早く治さないと、みたいな。遊んだ日々を思い出して、会うことによってより良い刺激みたいなのがあのかなと思う。」と、[きょうだいと会えたことでの治療に対する前向きな気持ちの出現]や「病気になって気持ちが落ち込むと治りにくい気もするので、面会をして少しでも楽しい事を与えてあげれば回復も早くなるのかなと思います。」と、[楽しみを実感することでの病気の回復を促進する可能性]をもたらす効果と認識していた。

2) 【楽しさの実感】は、「面会をしてお姉ちゃんと楽しく過ごすことができたので病院にいて楽しみってそんなにないじゃないですか、そこで面会をする楽しみをもつ事が出来るというのは良いと思います。」と、[つまらない入院生活での楽しさの実感]や「入院中はあまり笑顔もなくイライラしていたんですけど、お姉ちゃんが面会に来てくれたことで凄く喜んで、普段より楽しそうに遊んでいました。」と、[普段きょうだいと共に過ごしている時以上の楽しさの実感]をもたらす効果と認識していた。また、「音楽をかけて踊るなどしていたんですけど、痛くないのかなと思いました。痛い痒いも楽しい時は忘れられるんですかね。」と、[疾患から生じる苦痛を忘れさせるほどの楽しさの実感]をもたらす効果と認識していた。

3) 【安心感の獲得】では、「普段は家族一緒にいるのが自然な状態なので、入院中に面会をして少しでも(家族一緒に)なれると言うのは子どもたちにとって精神的に少し安心するのかなと思う。」と、[家族一緒という自然な状態になれることでの安心感の獲得]や「付添い交代の時は病院に来て自分も自分は会えないという形だったんですけど、面会してから会えないんだという意識がなくなって、会おうと思えば会えるんだなというのがありました。安心感があるのかな。それは感じますね。」と、[きょうだいに会えないという意識から会えると分かったことでの安心感の獲得]をもたらす効果と認識していた。また、「普段喧嘩ばかりしているので会いたいとは言わないですけどね、お姉ちゃんの事を聞いたりしていたので気にしていたのかな。面会をしたときは、部屋に入ってきた時からニコニコしていました。」と、[実際に会えたことで

のきょうだいを心配する気持ちの軽減]をもたらす効果と認識していた。

4) 【満足感の獲得】では、「テレビ電話を使って少しはコミュニケーションを取れるようにしていたんですけど、それでも寂しそうで会いたがっていたので、面会して少しは機嫌がよくなって、聞き分けがよくなったかなと思います。」と、[きょうだいに会えたことでの満足感の獲得]をもたらす効果と認識していた。

5) 【精神的負担の緩和】では、「入院中は物を投げるなど普段よりも機嫌悪くストレスが溜まっている様だったので、面会をしてお姉ちゃんの顔を見てニコニコしているだけでも気分転換になって、少しはストレス発散になったかなと思いますね。」と、[きょうだいに会えたことでの入院のストレスの軽減]や「お姉ちゃんに会えないことで寂しがっていました。面会できなくなるととても我慢をすることになるので、一日見るだけでも寂しさは和らぐと思います。」と、[きょうだいに会えない寂しさの緩和]をもたらす効果と認識していた。

6) 【喜びの実感】では、「普段からよく笑うんですけど、面会した時は久々に会えたからかいつも以上にニコッと笑っていましたね。」と、[久しぶりにきょうだいに会えたことでの普段以上の喜びの実感]をもたらす効果と認識していた。

7) 【きょうだいとの親密さの出現】では、「普段はすぐに喧嘩になるんですけど、面会の時はキャラクター言って二人がベッドの上で絵を描いたり、踊ったりしていて、普段と違う感じでしたね。すごく仲が良いんだと思いました。」と、[普段見られないほどのきょうだいとの親密さの出現]や「電話で少しはコミュニケーションを取れるようにしていたんですけど、それでも寂しそうで会いたがっていました。面会をしてお姉ちゃんに会った時にはすごく喜んで、ニコニコしながらお互いに抱っこしていました。」と、[普段のきょうだいの仲の良さの再現]をもたらす効果と認識していた。

8) 【年上としての自覚の出現】では、「普段なら自分が描いていたら全然きょうだいには譲らないんですよね。でも面会中は寂しかったのか、(スケッチブックを) どうぞってお姉ちゃんらしく譲ることができていました。」と、「普段見られなかった年上としての自覚の出現」をもたらす効果と認識していた。

VI. 考 察

本研究において、今回母親が認識するきょうだいの面会が患児にもたらす効果が明らかとなった。現状の小児の入院環境をみると、急性疾患で入院する乳幼児期の患児の多くは保護者、とりわけ母親が24時間付添いをしており、入院中であっても患児と母親の関係は分離されることなく、入院前同様継続されることが多い。しかし、本邦の一般的な小児の入院環境において学童期以前のきょうだいとの分離は必然といっても過言ではない。この様な状況の中、家族は、これに所属する人々の生存ないし安息の根拠地であり¹⁾、入院生活の中できょうだいと面会することで患児に笑顔が見られたり楽しそうにしたりしている様子から、母親はひと時でも入院前と同様の家族という安息の場が再現されたことで患児に【安心感の獲得】がもたらされたと認識したのではないかと考える。

また、入院に伴い患児は、普段意識せずもてていたきょうだいとの交流がもてなくなる。そのため、面会中のきょうだいとの関わりに「普段見られないほどのきょうだいとの親密さの出現」や「普段のきょうだいの仲の良さの再現」を実際に母親が知覚したため、これらをもたらす効果と認識したことが示唆された。さらに、母親は、きょうだい同士が会えたことで、寂しさやストレスなどの精神的負担への緩和をもたらす効果と認識していた。これは、入院中の患児がきょうだいと面会することで、普段きょうだいとともに過ごしている時と同様かそれ以上の楽しい表情や様子から母親は「きょうだいに会えない寂しさの緩和」や「きょうだいに会えたことでの入院のストレスの軽減」が図られたと認識したと考える。同時に、面会したことで会えないという意識から会えると分かったことが、患児に【安心感の獲得】をもたらすと認識していた。現在、感染予防を理由に面会制限をしている病院が多いが、面会制限があることで患児はきょうだいと直接的なコミュニケーションが持てず、両者の距離感が広が

ることが危惧されている¹¹⁾。両者が会いたいのにならず、お互いの様子がわからないという不安を軽減させるためにも、きょうだいの面会緩和を進めていく意義は大きいと考える。そして、つまらない生活から解放されたことによる【楽しさの実感】ももたらす効果として認識された。今回の患児の年齢は1名を除き1～3歳であり、一人遊びが主となる。しかし、実際入院中の患児がきょうだいと面会をすることで、一時的ではあるが遊びの幅が増えたり、普段の様にきょうだい同士一緒に遊んでいた様子から母親は、楽しさの実感をもたらす効果と認識したのではないかと考える。特に、入院中の子どもにとっての遊びはストレスの発散や検査・処置への恐怖心の緩和を図る役割があり¹⁵⁾、今回母親からもきょうだいと一緒に遊ぶことは【精神的負担の緩和】が図れると認識されており、面会は患児が入院生活を乗り越えていくための一助になると考える。

患児の身体面や治療の側面に対して、母親は、患児が入院環境や治療によるストレス、罹患したことによる気持ちの落ち込みにより、活気の低下や病気が治りにくくなるという状況を改善できるであろう【活力の充足】をもたらす効果として認識していた。この認識は、急性疾患で入院している患児特有の効果ではないかと考える。なぜなら、慢性疾患であっても患児は、入院環境によるストレスや罹患したことによる気持ちの落ち込みはみられると推測するが、慢性疾患では、症状が安定していたり進行が緩やかであったりと、突発的に処置や検査が行われることは少ない。しかし、急性疾患は、症状が急激に悪化し緊急入院するケースが多く、入院直後に検査や治療などが次々と実施されていく。実際の患児の様子からも、症状の増悪が急であることから患児の苦痛も強く、ストレスや気持ちの落ち込みは著明なことが多い。先述したように、遊びは入院の混乱や環境のなじめなさを軽減させたり、検査や処置などを乗り越えていく助けとなったりするため¹⁵⁾、こういった状況の中で、入院中の患児がきょうだいと面会することは、母親の認識からではあるが精神面だけでなく患児の身体面の安定にもつながることが期待できる。

また、母親は「疾患から生じる苦痛を忘れさせるほどの楽しさの実感」をもたらす効果と認識していた。面会中に、きょうだいと楽しく過ごすことは、入院生

活や治療・症状から生じる苦痛に向いている意識を楽しむことができ、一時的ではあるだろうが患児の身体的な苦痛の軽減にもつながっているのではないかと考える。

母親が認識したもたらす効果において出生順が影響することとして〔実際に会えたことでのきょうだいを心配する気持ちの軽減〕があり、これは出生順が早い子どもに対してもたらす効果として認識された。一般的なきょうだい関係は、タテの関係とヨコの関係を合成したナナメの関係¹⁶⁾であり、特に兄・姉ではタテ関係である兄らしさ姉らしさを発揮してきょうだいの面倒を見たり世話をしたりするという行動がみられる¹⁷⁾。そのため、出生順の早い子どもは、自分が入院していたとしても相手のことを思いやり、心配するという気持ちが生じているのではないかと推測する。そして、相手を心配し、気遣いや思いやる気持ちが自然と湧いてくることで、〔普段見られなかった年上としての自覚の出現〕が母親によってもたらす効果として認識されたと考える。

VII. 結論

1. 入院中の患児ときょうだいとの面会が、患児にもたらす効果として母親が認識したものは、【活力の充足】【楽しさの実感】【安心感の獲得】【満足感の獲得】【精神的負担の緩和】【喜びの実感】【きょうだいとの親密さの出現】【年上としての自覚の出現】の8つが見出された。

2. 母親が認識するもたらす効果から、面会は患児の精神面の安定だけでなく、【活力の充足】といった身体面の安定や年上としての新たな自覚の出現につながることが示唆された。

3. 今回母親が認識した患児にもたらす効果として注目すべきことは、きょうだいと面会で普段通り遊ぶことができたことで、患児が入院や治療に対し前向きな気持ちになることができ、病気の回復を促進する可能性があるといった【活力の充足】であった。

本研究の限界と今後の課題

今回母親の認識からではあるが、患児ときょうだいの面会について示唆を得ることができた。しかし、本

研究は、母親の認識から患児にもたらす効果を検討したものであり、患児自身が考える効果と齟齬がある可能性も否めない。また、面会がもたらす負の影響もあると考える。今後は、疾患や年代の幅を広げ様々な背景をもつ患児ときょうだいを対象とするとともに、患児ときょうだい当事者の視点からも面会の効果について検討することが必須である。

【謝 辞】

本研究にご協力いただきましたお母様方に深謝するとともに、病院関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。なお、本研究の一部は、三重県立看護大学大学院看護学研究科修士論文発表会および第34回日本看護科学学会学術集会において発表した。

【文 献】

- 1) 松田惺：新・児童心理学講座-家族関係と子ども-第12巻，金子書房，東京，1991.
- 2) 大熊保彦：きょうだい関係とは，小児看護，32(10)，1292-1296，2009.
- 3) 一般財団法人厚生労働統計協会，国民衛生の動向・厚生指針増刊，pp. 440-443，一般財団法人厚生労働統計協会，東京，2015.
- 4) 新家一輝：小児の入院と母親の付き添いがきょうだいに及ぼす影響と支援，小児看護，32(10)，1370-1378，2009.
- 5) 新家一輝，藤原千恵子：小児の入院と母親の付き添いが同胞に及ぼす影響－同胞の情緒と行動の問題の程度と属性・背景因子との関連性－，小児保健研究，66(4)，561-567，2007.
- 6) 高梨信子，高橋恵美子，江角静子他：子どもの入院に母親が付き添うことによる同胞に与える影響，島根県立看護短期大学紀要，7，37-43，2002.
- 7) 太田にわ，小野ツルコ，太田武夫：小児の母親付き添いによる長期入院が家族に及ぼす影響－家に残された同胞の精神面への影響，岡山大医療技短大紀要，3，55-61，1992.
- 8) 向川陽子，服部満生子：病児の入院時に家族が抱える問題とその支援，日本看護学会集録小児看護，27，8-10，1996.

- 9) 小嶋謙四郎：乳児期の母子関係アタッチメントの発達, pp. 109-116, 医学書院, 東京, 1989.
- 10) 新家一輝, 藤原千恵子：小児の入院と母親の付き添いが同胞に及ぼす影響－同胞の情緒と行動の問題の程度と属性・背景因子との関連性－, 小児保健研究, 66(4), 561-567, 2007.
- 11) 藤村真弓, 金城芳秀, 石川ちえみ：長期入院児のきょうだいに対する支援の視点, 日本小児看護学会誌, 13(2), 40-45, 2004.
- 12) 太田にわ, 萱嶋淑子：母親の付き添いの長期入院が家族に及ぼす影響-アンケート調査を通して-, 小児看護, 10(9), 1143-1148, 1987.
- 13) 及川郁子：子どもの入院が家族に及ぼす影響-家族危機への対応-, 小児看護, 16(4), 415-418, 1993.
- 14) 中嶋健之, 臼井徳満, 山南貞夫他：未熟児(NICU含む)における家族入室面会開始前1年および5年間の院内細菌感染症発症の動向, 小児科臨床, 43, 15 - 18, 1990.
- 15) 伊東和子：入院時の子どもの生活プログラム, 及川郁子, 病いと共に生きる子どもの看護, pp. 180-181, メヂカルフレンド社, 東京, 2005.
- 16) 依田明：きょうだいの研究, 大日本図書, 東京, 1990.
- 17) 福田孝子, 依田明：ふたりきょうだいにおけるきょうだい関係(2)－幼児期・児童期におけるきょうだい関係認知の発達的变化－, 横浜国立大学教育紀要, 26, 143-154, 1986.